様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　４ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２７２６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１１９０７

研究課題名（和文）スポーツする女性の身体へのまなざしの変容

研究課題名（英文）Shifting Gaze on the Body of Sporting Women

研究代表者
大友　りお（OTOMO, RIO）

日本映画大学・映画学部・特任教授

研究者番号：４０６１８６１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：スポーツをする女性の身体のイメージが、日本社会でどのように回覧されているのかを研究した。64年東京オリンピックでの女性たちの活躍は、女子小学生のスポーツに対する熱意を生み、社会がそれを包容するかに見えた。しかし近年、スポーツ女子の表象は、オタク文化が大量に生産する「萌え」に見る少女的身体や「戦闘美少女」のイメージと重なり、少女の現実からかけ離れたところで消費されている。少女的身体のイメージは、社会の一部が楽しみのために消費するだけでなく、社会全体がそれを当たり前として受け入れていることが問題である。実際にスポーツをする少女たちは、それをどう受け止めているのか、を問う必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
スポーツとジェンダーに関わる課題は、トランスジェンダーのスポーツ参加に関する個の権利とフェアネスの問題として近年大きく取り上げられている。そこでなされる様々な議論は、女性は男性より劣った運動能力の持ち主であると言う起点を共有し、運動能力の基準が男性中心に構築されたものさしであることを再考する方向には向かっていない。
本研究は、ポピュラーなメディアを通して、女性の身体が性的欲望の対象であることがノームとして受け入れられる日本社会を見つめ、そのような空間でスポーツをする少女たちは、いかに自分の身体と向き合うのか、権利とフェアネスの課題を追求した。

研究成果の概要（英文）：My research focused on the ways in which the images of sporting women's bodies are cirulated in the Japanese society. At the first glance the 1964 Tokyo Olympic Games where the successful performance of sporting women produced a widespread enthuseusm for women to play sports. In the recent decades, however, the images of sporting girls and women have been overlayed by the images proliferated by the "Otaku" culture, such as the bodies of "Moe" girls, or the "heroic fighting" girls. They are a far cry from the reality of actual girls and women. The issue is not the desire of a particular clique commodifying them, but that the wider society accepting them as the norm. My question here on is how the sporting young girls accepting the norm, or rebelling against it, to find their own sporitng life.

研究分野：フェミニズム

キーワード：女性　スポーツ　東京オリンピック　ライトノベル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

卓越した運動能力を獲得するために、自己の欲求を制御し、身体を思い通りにコントロールする術を身につけることが、個のエンパワメントに大きな効果を持つであろうことは明白である。しかし、女性のアスリートの場合は、素直にそれを自己表現に繋げることが難しい。なぜなら、マスキュリニティの理想的身体が、より「速く、高く、強く」というスポーツの達成目標と合致する一方で、フェミニニティに付されてきた特質は、それとは相入れないという社会的歴史的側面があるからだ。研究開始当初（2018）日本社会がスポーツする女性の身体に向ける「まなざし」は、1964 年初回東京オリンピック以降、女性にとってより良い方向に変化してきたように感じられた。新たなスポーツ分野（ソフトボール、サッカー、レスリング、柔道、そして冬のカーリングなど）で女性たちの活躍をメディアが大きく取り上げ、海外のスポーツメディアには見られない高いレベルの報道がなされていた。

２．研究の目的

映像・写真メディアを通して、またライブ放送やネット上の言説で、スポーツする女性の身体はどう見られ、語られているのか。本研究は二回目の東京大会（2022 年開催予定）を見据えた時点で、これを検証することが目的である。スポーツする身体は、子を産む母の身体や、性愛の対象としてのエロティックな身体と、どのように差異化されているのか。あるいはそれらが混在しているなら、そのまなざしは、若年の女性アスリートの生き方の選択にどのように反映されるのか。身体を前面に押し出すスポーツの空間にはジェンダーの一般的な問題が凝縮されている、という立場からこの研究を展開し、1960 年代にあった課題がいかに回収されたか、あるいは、異なった形で継続しているか、を考察する。今回の研究では「まなざし」（ジャック・ラカン）と「言説」（ミッシェル・フーコー）という学問的な（実体のない）概念を、可能な限り見える形にして発表することに挑戦したい。

３．研究の方法

2007 年に発表した論文“Narratives, the Body, the 1964 Tokyo Olympics”（Asian Studies Review, 31.2:117-132）において私は、戦前の国家主義の言説が、東京オリンピックを伝えるメディアと観客に共有されていたことを指摘し、アスリートの身体がその語りの中でどのように「消費」されたかを論じた。なかでも、女子バレーボール「東洋の魔女」にまつわる「生理中も烈しいトレーニングを課した」監督を称える言説と、それに伴う「鬼のように厳しいが愛情深い」理想的な父の誕生（あるいは敗戦によって失われた男たちの尊厳の復活）は、それを表す一例であった。また、自衛隊員でマラソン選手の円谷幸吉の自死も、それを侍の死として称えた三島由紀夫によるオリンピック報道記事を、村上春樹が書いた 2000 年シドニー・オリンピックにおける女子マラソンの報道記事と対比して、個の身体とそれが引き受ける外からのまなざしの変容に注目した。

本研究でも同様な文献研究を前半に行うが、後半にはアスリートへのインタビューを中心にしたフィールドワークを加える。そしてそれを短編ドキュメンタリーとして完成することで、実証的な研究とその結果の一般社会への発信を試みる。

４．研究成果

日本女性がスポーツとどう関わったかという歴史的背景を探ることに予想以上の時間を費やした。歴史を探ることは現在を語る上で有効なツールになると考え、資料と取り組んだ。その上で、研究目標の修正の可能性が浮かんできた。そこで対面したのは、スポーツをする少女たちのイメージの変容である。64 年東京オリンピックでの女性たちの活躍は、女子小学生のスポーツに対する熱意を生み、社会がそれを包容するかに見えた。しかし近年、スポーツ女子の表象は、オタク文化が大量に生産する「萌え」に見る少女的身体や「戦闘美少女」のイメージと重なり、少女の現実からかけ離れたところで消費されている。少女的身体のイメージは、社会の一部が楽しみのために消費するだけでなく、社会全体がそれを当たり前として受け入れていることが問題である。実際にスポーツをする少女たちは、それをどう受け止めているのか、を問う必要があると強く感じた。ところが、コロナ禍の到来によって、国内外のフィールドワークが不可能となり、大学教育のオンライン化を主導する立場にたったため、2020-2022 の 2 年間は、机上の研究に限られ、延期して開催された東京大会自体もテレビを通しての観戦のみとなった。2022 年秋にようやく国際シンポジウムを開催することができ、参加者の間で女性の身体のイメージがいかに回覧され消費され、女性がそれをどのように受け止めているか、という課題を巡って討議することができた。女性の身体が性的欲望の対象であることがノームとして受け入れられている社会で、スポーツする少女たちは、いかに自分の身体と向き合うのか。この疑問への答えはまだ得られていない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 RIO OTOMO	４．巻 46(1)
２．論文標題 Book Review for "Double Visions, Double Fictionsz' by B.T. Posada"s	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Japanese Studies	６．最初と最後の頁 217-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Rio Otomo
２．発表標題 The Trajectory of an Ultranationalist Woman
３．学会等名 Japan Studies of Australain Association（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Rio Otomo
２．発表標題 Discussant's response to the Gender Panel
３．学会等名 European Consortium of Political Research（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 International Symposium: Contexualising the Body	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関